

高山邊りの評判は素晴らしいものであった。

事業は順調に進み大正六年には木曾で拾萬圓の山を買ひ、郡上・飛驒方面でも買い出し、郡上川、飛驒川、木曾川の沿線一圓凡てに亘って伐出を初めて、時期もよかつた關係もあらうが大成績を納めた。

この頃に至つて山の風潮、思想が漸次質實に變つた様である。即ち實業である以上驕るものゝ永續するものでないといふ事が自分の趣旨であつて、その通り實行して之れが多少でも山の風潮に好影響を齎らしたことは欣快であつた、要は質素に地道に事業を遂行するものは最後の勝利者となるといふ事を實證したわけで、常時驕り長じられた人々は現在に至つて山林事業に雄飛して居られず、どちらかと云へば衰退の道を辿られてゐる様である

壯年時代

濱木屋株式組織となる

大正四年から五年へかけて歐洲大戰の影響でインフレ景氣、大戰景氣は旺んなもので、

一大ブームを現出し、濱木屋も順風に帆をあげて事業益々隆盛に向ひ、尚ほ前述の濱木屋の相續者伊藤貞次郎氏は都合上別居退身せられ大正七年三河西尾町の舊家外山家より女婿を迎へられた、現在の濱木屋社長伊藤千里氏であつて、意志堅固温厚にて最も良き女婿であつた。この千里氏の許に諸員一致協力の結實は遂に大正九年に至つて資本金六十萬圓（三十萬圓拂込）の株式會社組織とする事が出來た。此處迄の苦難、努力は吾れ人共に筆紙に盡し難く、時勢の推運に依るところも亦大であつたらうが前述の如き幾多の泪の慘む様な辛苦の結果であつたことを想ひ切々と胸に迫るものがある。

「編者附記」濱木屋が合資組織となつて事業に更新の氣力が加はり、順調なる發展を遂げて株式會社となる迄の、即ち明治四十三年以來歐洲大戰休戦に至る間の世情一般、政治、經濟諸狀勢の主なるものを擧ぐれば

先づ名古屋市に於ては明治四十三年に第十回關西共進會が現鶴舞公園附近一帯に華々しく開催され、當時としては畫期的大博覽會の事とて内外の視聽を聚むる處となり、大名古屋市の發展は此の年より加速度的に進みたり、此の年は更らに名古屋で開府三百年記念祭が開かれ、共進會、記念祭と洵に素晴らしい大賑ひを見せた、明治四十四年には

中央線全線開通し、名古屋市に於て之が全通式が舉行せられて、國鐵の躍進を謳歌した事であつた。目を轉じて國內の狀勢に就いて觀るならば、明治四十三年年初政府は議會に工場法案を提出、政友會は之に反對、ために政府は案を撤回せり、五月、幸徳傳次郎大石誠之助、森近運平等の所謂大逆事件起り一世を震撼せしむ、八月廿二日韓國併合條約調印し朝鮮は吾が版圖となれり、初代朝鮮總督には時の寺内陸相兼任せられる。四十年は外資の輸入旺盛にして爲に金融は緩漫、東西銀行に於てシンジケート組織され、四分利整理公債發行の事あり内債借換に成功す、之れ即ち我國「金利の革命」と云はれる處なり。明治四十四年一月大逆事件の判決下り、幸徳、大石、森近等十二名は死刑、乗松與二郎、岡本穎一郎等十二名無期懲役言渡さる、同年三月工場法公布、同法は明治四十五年六月より實施豫定の所延期されて大正五年より實施さる、八月韓國銀行を朝鮮銀行と改む、十月十二日支那革命黨の亂興り、紡績業動搖、相當の影響を受く。同年は通商條約の改正行はれ、これより國定稅率時代に入る、然して改正稅率においては保護主義が採入れられる、この年の邦商の貿易取扱高輸出五二%、輸入六四%にて貿易の實權は從來外商の手にありしもが邦商の手に歸す、明治四十五年二月十二日清國宣統帝退

位、中華民國假政府成立、我が各地紡績會社中支那動亂終止と中華民國假政府出現に依り増資するもの多し、六日に至り米價騰貴のため各地貧民の窮狀を報ずるもの多く、七月之れが爲細民施米及び原價賣買米の鐵道運賃五割引實施せらる。

七月三十日

明治天皇御崩御被遊、國民齊しく憂愁に閉ざされ名狀すべからざる沈鬱哀借の念に打たる、大正天皇御踐柞被遊、大正と改元。

大正元年九月十三日

明治天皇御大喪、乃木大將夫妻殉死せらる、同十二月二日上原陸相はニヶ師團増設を主張し、閣僚の容るゝ所とならず、單獨拜謁辭表捧呈す、越へて同月五日西園寺内閣は後任陸相を得る能はず、總辭職、即ち陸軍全體がニヶ師團増設に決定したるためなり、依つて翌日より元老會議數度開かれたるも後任首相難に陥る。同十九日には憲政擁護大會開かれ朝野の議論沸騰す、廿一日に至り第三次桂太郎内閣成立、本年の經濟界の大勢は外資輸入杜絶し國際貸借全く逆調を示した、入超一億圓に達し外債の利拂政府民間の分を合して八千萬圓に上る、依つて正貨の流出多く、日銀の正貨準備の維持問題朝野識

者の深憂するところとなる、金融もまた逼迫甚しく下記には銀行會社の破綻多し、その裡著名なるものは九月下旬資本金二千九百萬圓、關係會社八十社に及ぶ才賀電氣商會の破綻なり。大正二年は政治界の動向が幾變轉を示したる年にして一月十七日憲政擁護全國記者大會開かる、同二十日桂首相新政黨組織を發表す、同廿一日議會は停會を命ぜらる、二月五日衆議院に於て内閣不信任決議案付議、爲に議會五日間停會となる、同七日桂首相の新政黨立憲同志會宣言書發表、翌八日桂内閣は西園寺公に會見し時局收拾を依頼翌九日西園寺公宮中へ召され、時局收拾の敕語を賜る、同十日政友會は西園寺公の勸告を容れず、不信任案を以て邁進する注意を示す、依つて議會は三度三日間停會を命ぜられ、帝都騷擾時局益々紛糾す。十二日山本權兵衛大將に内閣組織の大命降下す、同十九日政友會は山本内閣を援助するに決意す。之れに依り政友會と憲政擁護を共にしたる國民黨は政友會と提携を絶つに至る。五月三日米國加州排日土地法案兩院通過し我國は八日第一回對米抗議をなせつり、六月十三日陸海軍大臣の任用資格を現役より豫備役迄擴張、同月行政整理案發表さる、十月六日支那共和國を承認す、時の大總統は袁世凱也、十二月廿三日立憲同志會結黨式を擧げ加藤高明氏總理となる、經濟界の狀態としては、

東北地方水害凶作あり内務省より低利資金六百萬圓融通を決定、本年の景氣は沈衰の底に達し、對外支拂激増、在外正貨涸渇して兌換券の基礎危ぶまる、此の年鈴木商店の援助の下に米澤市に東北工業株式會社、ヴィスコース法による人絹製造工場を設立すこれ實に近年世人の耳目を聚めつゝ長期審理を續けられつゝある帝人事件の本尊たる帝國人絹株式會社（大正七年改稱）の前身である。大正三年、一月廿三日海軍收賄事件（所謂シーメンス事件）衆議院の問題となり、二月十日衆議院に海軍收賄事件に關する内閣不信任案提出されたるも否決さる、國民大會開かれ帝都騷擾時局混亂を來す、結局シーメンス事件の責を負い三月廿四日山本内閣總辭職を爲す、同廿六日議會閉會、これより元老會議數回開かれ、後任首相に徳川家達公、清浦奎吾氏等を推薦せしも實現せず、四月十六日大隈内閣成立。六月廿八日墮太利皇太子サラエヴォにてセルビアの一青年の爲暗殺せらる、八月一日露獨開戦し歐洲大戰初まる、同月十六日日本はドイツに最後通牒を發し同廿三日對獨宣戰、十月十四日には南洋獨領諸島占領し、十一月七日に至り青島攻略をなす、經濟事情については三月東京停車場竣工、九月、臨時軍事豫算通過し、工業原料輸出制限法實施、戰時海上保險補償法施行せらる、不景氣未だ容易に脱けず、貿易

輸出入共に減衰の道を辿る。大正四年、一月對支要求交渉を初む（所謂二十一ヶ條要求也）日支交渉は容易に進捗せざりしため五月七日に至り對支最後通牒を交付す、之に對し支那は五月廿五日山東、南滿州、東部蒙古の我が利權に對し遂に全部承認し日支交渉條約調印成立す。

十一月十日大正天皇御即位大禮を京都に行はせらる。

此の年大戰の勃發により大打撃を蒙りたる蠶糸業救済のため官民合同の第一次帝國蠶糸會社設立し糸價維持の建前より六十八萬斤の生糸買入に當る、年末近くに至り大戰の好影響現出して出超一億七千五百萬圓を示し、通價膨張、諸物價騰貴、同時に米國の景氣回復により絲價昂騰、千百圓臺の相場現はれ、蠶絲業立ち直る。大正五年、此の年は昨年以來の好況續けられ株式市場も亦活況を呈す、大戰中なるを以て時局關係事業極めて殷振を告げ、化學工業、鐵鋼機械工業の新設されるもの多し。理研で有名な理化學研究所は本年三月の設立になるものなり。大正六年、三月ロシア革命勃發し、露帝退位、六月には期米昂騰し先物廿三圓六十九錢を唱ふ、九月金輸出禁止、十月に至り少額紙幣發行令發布、即ち小錢拂底のため兩替賃暴騰し小賣商、湯屋業等の金券私造盛に行はる、

貿易極めて順調にして出超五億七千五百萬圓、空前の大出超を現出せり。大正七年、昨年來の米價漸騰傾向は本年一月に入りて暴騰を演じ農商務省は米買占警告をなし、大阪の正米商續々検事局に召換さる、而して各地期米市場立合停止に至る。七月に入り米價の奔騰は依然熄まず、農商務省では米穀仲買人の米買占に對して頻々として警告戒告を發す、八月五日米價奔騰に依り富山縣滑川町に婦女達が一揆を起し同九日同縣西水橋に擴大し、やがて全國に波及して有名なる「米騒動」となる、米價の最高値は正米一圓臺乗せを示すに至る、従つて穀物收用緊急敕令公布され、米收用價格は一石卅圓乃至卅二圓と公定さる、十一月十一日に至りさしもの歐洲大戰も遂に休戰條約成立し終息す、我が國よりは後に媾和金權として西園寺、牧野氏等が巴里に派遣されることゝなつた、十二月には英米の鐵解禁のため關西の鐵商破綻するもの多し。一方名古屋木材界の諸狀勢に就て述べるならば明治四十三年五月十二日愛知縣會議事堂に於て日本材木業聯合會開催され山林局長、知事、大阪大林區署長、市長等三十五名の來賓と數百名の會員參列して盛會、翌十三日御園座に於て餘興を催す、明治四十五年四月十五日岡田名古屋市勸業課長清國動亂後の實業を視察せらるゝ旨組合に通知あり依つて該地方の木材狀況調査を

依囑す。九月二十三日大暴風雨あり、木曾飛驒兩川増水して川狩中の木材多數流散せり。大正二年十月十四日出材部常任委員會を開き三鱗組が株式會社組織に變更して事業繼承の旨を承認し又綱料等の協定をなす、大正三年二月二十六日木場日傭人夫救護會設立さる、同五月八日帝室林野管理局が御料林を拂下ぐるに當り本年度よりは從來の尺締法を廢止し、石建となりたるを以て當地方古來の商習慣に背き且つ計算上營業者の不利不便尠からずとなし總會の決議を以て其の復舊方請願書を提出す、同十月五日組合員にして汽船積材木業の從事せる有力者相圖り木材移入商同盟會を組織す。大正七年八月二十五日出材部常任委員會を開き下麻生しもあそに於ける綱料及解搔下料は明治三十六年四月の解決書に基き五ヶ年目毎に米價を標準として改訂すべき契約ありて本年は恰も改正期なるを以て其の改率及三鱗株式會社の懇請に係る特別手當金の協議を爲したり。

「編者附記」多少前後に亘るやも知れないが歐洲大戰前迄の時代の變遷について自分の感じた事ども一、三を述べて見たいと思ふ。歐洲大戰前迄は文化の程度も低く、進み方も急速でなかつたと云ふ事が今から思はれる。それが大正三、四年頃から世相百般に亘つて急速に諸狀勢の發達變化が齎あされたのである。自動車の如きも名古屋で最初に乗り

廻して居た人は中西萬藏氏位で、紳士の一つの娛樂物と一般人は視なして斯の如きものは實用に適するものではないといふ觀念を持つてゐたのが明治四十四、五年頃である。著者が初めて東京へ行った時は明治四十年で今の汐留驛が新橋驛といつた時代で東京驛はなかつた（著者は之の時初めて洋服を着用）乗物は電車はあつたが主として田舎者は何れも人力車に乗つたもので之れが唯一の市内交通機關で自動車は東京驛が出来てからである、宿泊料の如きも二食付一圓位で日本橋蓬萊屋に泊れたものが現今では五圓乃至六圓位である。大阪は明治三十四年著者二十才の頃には電車無く巡航船と人力車（二人乗りもあつた）によつたもので、神戸の湊川新開地は當時河原であつた。

九州各地に於ける

山林伐出積極的進出

大正五年には九州日向國兒湯郡東米良村字白鏡こゆめらしるみに於て一大山林を買收し、其間種々なる難關にも遭遇したが伐採を開始し、引續き附近圓形十數里の間遠く熊本縣界迄各所に於て

大小山林を買添へ大正九年迄毎年一川瀬川を利用して宮崎市の北三里廣瀬福島港へ流送し同所より船積みをもつて神戸、大阪、名古屋へ輸送した、其材種は梅を主とし樅、松等であつた。

此の事業の五ヶ年間に於ける伐出方法、木馬きうま、小谷の堰出し、大川管流等には一大改良を加へ同地方の人心に新しい山林事業の諸法を知らしめた、此の地は日本祖先發祥の地であり、我邦で最も早く開けた土地であるのにこの當時としてはおそらく文化は最も遅れてゐる處だと思はれた。

其の一例としては

電氣の設備などはなく、村の娘は全部素足で繩の帶であつて明治末期頃迄袴、綿入れを知らず、著者が銀鏡村しろみに事業を開始した當時漸く袴を着用する事を知り、綿入れを見たる事なしと村人が明言してゐた位である。

道路等も充分のものではなく勿論山道のみで山の事務所より電信を發信するに七里餘の山道を越へて行かねば郵便局がなかつたので特使をたてゝ往復二日ばかりで電信を打つたものである、又木材はすべて角材に造材して出す慣習であつて丸太は坑木のみであつたが著者

が初めて丸太で出材することを開始したので土地の人々は坑木が川を流れる様になつたと驚嘆した、尚流送の方法も夫れ迄は天水を利用して本谷の川狩をなす風習であつたが著者

は木曾福島きそふくしま、上松あけまつ、野尻のじり、三留野みどの、付知つけち、小阪等各地から五十三名の入夫を募集して之れを引率して所謂木曾風の堰出し法を實施したので、九州各地の營林署官吏及山林出材業者

の見學引きも切らぬ有様であつた。天水利用法とは平水の時木馴きなひをなし降雨又は大水を待つて自然的に流し出すもので減水すると所々に引掛り居る故、次の出水の場合なるべく早

く流れ出る様に良い場所に木直きなおしをして第二の出水を待つ、之れを繰返して十數里の間を流し流して天然、自然的に流すといふのであつて、之の方法が日向の木材搬出の習慣であつた、夫れを打破したわけであるが、遺憾ながらこの木曾風搬出法は初年は大失敗に終つ

た、即ち膨大な費用を投じて廣瀬福島港へ木鼻が到着した時不幸大洪水に見舞はれ尺々二萬本は全部日向難に押し流されてしまったのである、之れが大正六年の事である、時に著者は名古屋に在つてこの大洪水による全部流出の電報を事業主任磯田芳松君（現在著者經營の大江合板株式會社に勤務）から受け急遽出發、陸路關門海峡を渡り日向線、鹿兒島本線

によつて吉松、都城を経て廣瀬福島へ二晝夜を要して到着、海岸へ馳け付けて見れば日向

難一面に白く木材が浮び潮につれて右に左に漂つてゐる、この二萬本からの流材の一塊を眺めた時は思はず流涕を禁じ得なかつた。如斯場合は最早や神を頼る外なしとして祈願をこめ、恰度流出後三日目に漸く風向も變り、海も和らぎ、延長二十里餘の海岸線各所に打ち上げられた、その中には他の同業者のものもあり其數約三十萬本であつた、此の流出當時一ツ瀨川の國道にかけられた橋梁（約三萬圓で架設されたもので西南戦争の時西郷隆盛が渡つた事のある由緒ある橋）及び宮崎縣で初めての試みたる杉安と云ふ個所に架けられた鐵筋コンクリート橋、日豊線建設假橋とを墜落流失せしめ、宮崎縣より若干圓、鐵橋架橋請負工事者より四千圓の損害賠償を申込み宮崎縣當局や各林業者との間に種々論議が交はされ結局林業者側から合同で沿岸關係者及び鐵橋請負業者へ約二千圓を提供して事を納め得たわけであつた、斯くして神の加護か全部沿岸に漂着した木材を集材し船積にするのであるがここにも又難關が一つあり、それは好景氣時代の頂點に達してゐた折として輸送船拂底、運賃は狂熱的昂騰を演じて居り、加之福島港は河口淺く積込困難の理由から運賃を奮發しても備船に應じない、で止むなく窮餘の策として伊勢の大湊で一隻、桑名で一隻の輸送船三隻を新造して廻送し、産地港と阪神間輸送の專屬船とした、斯くして第一回の

おきみなと

積込みを終り所謂處女航海に於て一番大きい濱成丸が瀨戸内海栗島海峡で暗礁に乗り上げ輸送力に大きな手違ひを生じたが然し天なるかな、斯く流材や輸送上に齟齬をすればする程木材相場は騰貴し不幸が返つて僥倖となつたのであつて最初阪神間で拇角尺 \times 六圓位のものが逐次昂騰歩調を辿りこの輸送最盛時には十一、二圓になつた、その爲損失すべき事業が返つて利益を計上する結果となつたがその間の辛苦は亦格別であつた、之の事業は大正九年を以つて打ち切り揚げた、事業中損失を見ずに終つた事は全く天祐といふべきであであつた。

積極的改革と

北海道、樺太材に着目

大正五年鴻恩ある先輩伊藤千里氏が胃癌にて長逝され其後任として僥倖にも合資會社濱木屋商店の代表社員となり、益々積極的方針の許に、多年固守して來た古風、舊式な一切の風習を打破改革して之れが成果をあげることに努力したのである、其一つの例としてあ

げてみるならば

この當時製材方法は一般同業者間に於ては夫々時代に順應した所謂新式の機械によつて各種の動力を利用して製材工場を建設經營して居られたが、濱木屋は當時尚ほ多年の習慣たる古風な木挽きに依る製材を行つてゐたのであつて、之に對し先輩政木氏の言も尊重し久しく逡巡してゐたが大決心を以て著者はこの製材方法を一變して動力に依る機械を据へつけたのである、然しこの當時は景氣が最高潮に達せる時代であつた爲に、電動力を得るのに頗る苦心した、即ち一馬力引込權利料五十圓を以つてするも容易に得られなかつた、種々苦慮の結果漸くにして七十五馬力サクソングス發生機を以て動力を起し、之れで機械を動したのである、即ち大正八年から九年に涉つて之の改革を斷行したのである。

北洋材に着目したのは、大正七年に日本材木業聯合大會が當時の清國安東縣及朝鮮新義州と即ち鴨綠江を挟んで開かれたのでこの大會に參列し、鴨綠江材の伐出状況を視察して奉天、大連を經由して内地に歸る間に於て木材は前途尚非常な暴騰を演ずるであらふといふ感を抱き歸名後直ちに北洋材方面に着眼し、まづ北海道の雜木を仕入れて積極的に進出を試み、引續き初めて、エゾ、トドの中丸太に向つて手を伸したのである、當時濱木屋で

は皆な異口同音に北海道材は粗惡材としてかえりみなかつた、その當時の一例としては

北海道檜角普通材百石三百五十圓上等物で五百圓迄

エゾ、トド中丸太は五百一、三十圓

であつた、其他栓、桂、榎等も市場の相場を以つて充分なる研究もなくして見込みで相當の數量を買上げたがそれが全て適中して兩三ヶ月間に純益二萬圓を計上した、其間初めて中丸太に着目して殊に樺太材の賣買といふ方面に興味を持ち、當時松昌洋行（山本唯三郎氏經營）が大泊に出張所を設けて島外移出禁止であつた樺太材の特許を受け内地方面へ移出してゐたので之れを水谷孝三氏の手を介して名古屋入荷分に對し獨占的仕入れをしたのである。

木曾、飛驒其他各地にも

一層積極的伐木陣を張る

北洋材方面に活躍するかたわら大正八年には同輩伊藤増吉君と謀り信州野尻で帝室林

野管理局から御料林を十萬二百圓で拂下げを受け種々の關係上王瀧村の中越次郎吉氏を共同者として同年末から九年へかけて名古屋へ出材し約六萬圓餘の純益を計上する事が出来た、更らに同年は群馬縣の黒磯驛から奥的那賀川上流で丹羽一市民の關係で青葉農林株式會社から檜葉丸太一萬本を買受け黒磯驛より陸送で東京へ輸送し東平野町岡由及森源兩店へ賣込んだが又亦約六萬三千圓の純益を計上した、此の事業は水谷孝三氏の井桁商會と合併に濱木屋で五分、井桁商會三分、服部小十郎二分の配分約束にて(途中服部氏は脱退)行つたのである、尚ほ上州沼田兩毛製紙の伐出した檜葉丸太八千本を買受け、其他大正五年以降長良川上流、郡上郡おくみょうがた奥明方村及小駄良村(現井桁藤商店支配人たる長田英雄君當時二十才にて主任たり)、飛驒川上流益田郡火打、久能川、竹原、下呂、萩原、上呂、馬瀨村、加茂郡くまがわ黒川、東白川、佐見、長野縣王瀧村、西野、末川、等に於て各種木材及鐵道用枕木を伐出したが、その數量は實に夥多に上つた。

未曾有の材界狂熱時代來る

市賣會を開催頗る大成功を收む

大正九年二月、未曾有の好景氣と共に天井知らずの昂騰を續ける木材界を注視洞察した時、最頂上相場を握ることはよくするところではない、商家の戦法は腹八分目を最上とせねばならぬと考え、そこで各地に於て積極的に伐採したものゝ利喰いを或程度するが良策であると痛感し、まづ東京に於て一部の處分を爲すべく井桁藤商會との合併分を東京森源に賣却した、この頃より著者は現在の暴騰相場はあまりにも不合理、不自然なる相場である、やがてはこの大反動の襲來するあるを覺悟せねばならないと愈々手持材の一掃的處分をすべきであるといふ氣分を濃厚にした、當時市賣會は名古屋木材株式會社が常設的に開市を爲しつゝあり、それ以外は同社への遠慮氣味もあつて差控へられてゐたが、著者は斷固市賣會を開くことに決心し、一應名古屋木材株式會社に了解を得て、大正九年三月十日

愈々指名者のみを濱木屋に参集願つて開市する手筈を整へたのである、ところが熱狂時代のことゆゑ三井、三菱、辰（鈴木）といった錚々たるところまで参加を迄ふて前人氣頗る旺盛で最初二十名内外の有力者のみの豫定であつたのが驚く勿れ六十名からに達したのである、この市賣の出品物は長良川、飛驒川、木曾、上州沼田方面より輸送したもの及び樺太中丸太等であつた。

愈々三月十日の開市當日の白熱的人氣はけだし空前絶後の盛況であつた、相場の如きも全く驚嘆すべき高値で

杉丸太	六以下	尺	二十九圓九十五錢	吉見	落札
松丸太		"	二十二圓	香川	"
松角	合角	"	三十五圓	竹廣	"
檜葉丸太		"	三十二圓五十錢	辻駒	"
檜丸太	中目	"	三十四圓五十錢	親友會連	"
同上		尺	四十五圓	親友會連	落札

杉丸太	一上	"	四十圓	永田	落札
同中目		"	三十五圓	"	"
樺太中丸太	七九掛百石		千六百三十五圓	新宮商行	へ二千石賣約

開市二時間後金額二十三萬五千圓の賣上高で出品全部を賣盡した、右の相場が今日迄の木材價格の最高であつたと思ふ。入札條件は落札と同時に現金二割、殘四割三月二十五日拂込、殘四割は四月十日現金を以つて完納の事、但期日前に物件受渡要求ある場合は金額拂込みの事、と云ふのであつた。入札翌日になつて一つの事件が惹起された、それは交渉委員が出来て契約金を手形とされたいといふ事であつたが時節柄拒絶し種々折衝の結果公債又は現金とし更に殘額拂込期日を四月十日の分を四月二十五日に延期方を要求され同業者の事であるから之を承認したのであるがこの事が結局後になつて大いなる誤りであつた事が判つた、最初下見の場合は高く見積つても二十一萬五千圓位と考へたのが入札は白熱的人氣で大成功を收め約二萬圓弱の賣増しとなり一同欣喜躍雀、手の舞ひ足の踏むところを知らず、とはこの事であらふ、この市賣會こそ木材界に於ける所謂木材史上特筆大書す

べき一項目であつて此の入札会の結果同業者は東に奔り西に走つて各方面で積極的仕入れを初めたのであつて、引續き三月十五日には吉村松太郎氏が市賣を開かれたがこの時は既に人氣は下り阪にあつて稍々沈滞してゐたのである、そこで著者は過般の市賣會ではまづ出品の半數位は残るであらうと考へてゐたが全部落札して貯材は僅少となつたので此際内地材熱狂相場のを仕入れても趣味もなく又不得策であると考へ三月十五日名古屋を出發して北海道に走り、釧路に於てエゾ、トドの尺三上太丸太三千石、樺太中丸太材七千石を買約し夫れより北海道各地を視察し遠く網走迄も行き小樽に引返した時木材一般市況は妙な雲行きにあることを察知して早々仕入れを中止し四月十六日東京迄引返したのである。

反動時代の襲來

大暴落おしよせる

この日（四月十六日）が東京兜町の株式大暴落の日で早速歸名したが、約束の三月廿五

日拂込みの四割金は殆ど拂込まれてゐない、止むなく夫々要求して掛合つたが木材も時既に大瓦落を現出し同業者は平身低頭して契約金二割放棄して契約解除を申出でる者續出したのである、そこで出來得る限り契約の履行を迫つたが尙歎願される向には止むなく契約金沒收して契約解消を決行したが、それが約二分の一あつた、この時の大暴落の一例としては、杉六以下尺ノ二十九圓九十五錢で落札されたものが一度に十五圓五十錢となりそれが五月下旬には十三圓五十錢と云ふ崩落振りを演じたのである、こつした暴落のため北海道で仕入れた太丸太千五百圓が千百圓となり中丸太千四百五十圓が慘落して名古屋へ入津した八月頃には七百五十圓となつた、右七千石の中丸太は水谷孝三、長谷川糾七、永田商店、鈴木虎之助氏等から買約しありしも契約金一萬五千圓に尙五千圓追加し二萬圓の解約金を出すからと解約申込むも聽入れられず結局百石千二百二十五圓に値引の上引取つたがこの中丸太を處分する上に於て製板を開始したのである。尙ほ東京では岡由、森源に賣却せる檜葉丸太一萬石の手形不渡十一萬餘圓となり周章狼狽して上京し東京木材商組合長長谷川鏡次氏の多大の盡力によつて總額二萬八千圓を値引し一ヶ年間割賦支拂方法で受取る事に解決した。

好況時代の狂熱振りから一瞬にして反落時代となったこの有爲天變に際會して著者は自己の思慮の足らざりし事を深く銘記したのであった。其後困難な事に逢着する毎に之を思ひ出し慚愧に堪へず、夜も眠られぬ日があった、物事が順風に帆をあげて平穩な大海原を進む様に意の如く進行する時はそれに有頂天となることなく一步退ひて靜かに考へ直すことが必要であると實際に直面して痛感した。又一方製材工場の建設も三萬五千圓の見積豫定が五萬となり七萬圓となつたが、事業も順調に進んでゐた際だから建設に力を致し其結果店舗の改築等も加はつてはゐるが兎に角十六萬七千五百圓を工場建設及店舗改築に費つたのである、尙ほ調子にまかせて六十萬圓の内三十萬圓拂込濟の株式組織とした事も拙劣な遣方であつたと後日思つた、即ち一つ順調さが欠けると、最初に勢ひの赴くまゝに遣りつ放した事が如何にも杜撰であつたと感じるもので、充分心すべきは「勝つて兜の緒を締めよ」である、斯くて暴落に惨落を重ねた木材商況も漸く大正九年八月頃に至つて平靜状態に復したが、此の間相當の犠牲者が續出したのであつて事態止むを得ぬ次第であつた。

中丸太の處分に苦心

出來合製板を開始する

さて七千石の中丸太を處分するに當り山岸製材（本山岸）淺井製材等に話しを進めたが樺太材は北海道産に比して硬質であり且つ寸銘も細いので製材能率が二割落ちる、それだけの割合安くないと引合はぬと云ふので顧り見られず他にも買手がなくこの處分に苦慮した結果東京へ出張して信ずべき取引先たる數矢町の喜多商店に就いて種々消化さす意見を聴取したるに東京向けの板を挽いて汐留迄送つてはどうかといふことで半ば好意的商談をとげ、二間入一束汐留着尺建二圓七十五錢で三千束を契約し、直ちにマーク、毛判其他製板用小道具類を注文して歸名直ちに製板に着手した、それが大正九年末期であるが何分にも出來合品板製作販賣の經驗が乏しかったので先輩たる岩田助次郎氏に助力を乞ふて同氏の店員を助手に依頼して撰別、結束等を実習し、エゾ、トドの並四分二分七、八里六分尺板（三分五里）、板割長二間（六分五里厚）の製板を開始した、（板長さ六尺（三寸伸巾は尺で二分裕の伸びで役物は抜かず全部込であつた）此の當時製板業者としては服部清太郎

氏がずっと古くから少しづつ製産して居られた位で北海板は引合ぬと云ふのが當時の通説の様であった、従つて積極的に出来合品の製板に着手したのは著者が嚆矢であつたと思ふ此の大正九年に於る名古屋の製材業の状況を数字的に回顧してみると、

工場数 九四 動力三 七四二馬力(内譯 電力二〇五九、火力一、二七一、瓦斯五二二)

機械種別 豎鋸七七、帶鋸二九、丸鋸三九一 計四九七

従業職工 男一、二六五人、女三八人 計一、三〇三人

であつた。一般の製材販賣業者はエゾ、トド板は不引合だと云ふ先入主で濱木屋がエゾ、トド板の製産を初めたが、今に損失を招くであらふといふ世評を浴せてゐた。著者はこう云ふ評判が立てば立つ程益々力を入れて、市内近在のみならず京、阪、神に出向ひて同地方の製板販賣方法に就いて研究を遂げた結果、板の出来る時分には市況も幾分反動的好調を帯び來り、結局岩田商店(岩田助次郎氏)が名古屋で庭着で仕入れるから東京直送の要なしとの事で、且つはかねてからの恩義もあり岩田氏に契約することとした、その板が岩田氏の手によつて大阪へ販賣され出すと同時に大阪の井上製函が來店され是非共賣つてくれとの事で一千束を大阪片町着二圓八十五錢で契約した、之れが一つの動機となつて大

阪の各方面から束につき一圓の契約金を持つて顧客が殺到するに至つたので愈々機械を増設し職工を倍數に増し晝夜交替で徹夜操業をなすも尙注文に應じ切れないと云ふ盛況振に向つた。

この當時の原木相場は百石六百二、三十圓で製板一束二圓八十五錢乃至九十五錢に販賣して歩留りからすべての計算をすると百石に付き百圓乃至百五十圓の純益を計上出来得たのであつて、製板創始當時一般に冷笑的罵言を浴せられたそれとは結果に於て雲泥の相違で幸ひな事であつた。

北海エゾ、トド製板中興の時(大正十年)

大正十年となつて益々エゾ並四分板、六分板、板割の需要増加と共に値段も騰貴し結局五月に至つて大阪片町着三圓十五錢迄昂騰し、原木中丸太は端境期のため七百圓どころを唱へ、順次下落の徵が見へ初めたのである、然し名古屋の製材業者も一般的にエゾ、トドの製板に關心を持ち初め、一齊に之れを着手したが時既に遅く、退歩の一步に入つてゐた

のである、即ち製板業者が雨後の筍の如く増加すると共に生産數量は過剰となり相場も下落し東二圓七十五錢迄引下がったのである、之の當時が即ち名古屋の北海エゾ、トドの製板中興の時代である、この事から考へて

「世間の風評、デマ、流説は或る程度考慮に入れねばならぬ」といふ事を痛感するのである。

大臺ヶ原山木材伐出事業計畫

大臺林業株式會社創立

大正八年の秋、井桁商會の水谷孝三氏と謀り紀州大臺ヶ原山の立木伐出事業を計畫し、熊澤一衛氏の援助によって富士製紙株式會社より三十八萬圓にて買収し種々なる關係上、熊澤派、水谷派、濱木屋派の三等分にて大正九年大臺林業株式會社を創林し同社にて大臺ヶ原山の經營をなすこととしたと同時に著者は同社の常務取締役に就任した。

米材輸入に着目し

第一回到巨利を博す

大正七年夏滿洲より歸名した當時より米國材輸入に着眼し、將來相當に日本へ輸入せられるものと豫想して弗々之れが研究を初めてゐた、九州地方の山林伐出事業の關係で阪神間を往復する毎に其取引上滞在することが多かったので、大阪の北村梅七氏より米材の取扱ひ方を教示してもらつてゐたが、大正八年の木材界狂熱時代には驚く勿れ一立方呎二圓七十錢迄騰貴するといふ始末で殆ど初心者の手を染める時ならずとみて研究のみに終つた其堂時はボードメーヂュアーが何であるか、ドクラスファーが何か、所謂名稱や材積、爲替等の換算に就いて未知の事が多く頭を悩ましたものである、然し種々研究の結果大正九年頃までにはかなりの程度まで會得することが出来、更に神戸に、又東京へ商用で出張する毎に何れは自分も米材を取扱はねばならぬものであるといふ固い信念のもとに之れが輸入方法、販賣方法を實地に就いて視察したが、未だ價格の點や何やかで名古屋へ直輸入する機會に恵まれなかつた、漸くにして大正九年末期となりその機運熟したりとみて大阪

の北村梅七氏を介してロバートダラーより松大角十八吋上百萬BMを四日市CIFで買った（當時は四日市より筏にて回漕）この時も尚ほ換算率が充分會得出來ず邦貨で立方一圓四錢で買った、之れが抑々伊勢灣へ大量の米材が輸入された嚆矢である、この入津は非常な注目をひき三井、三菱あたりからも色々見學に來られた、材質、規格共に非常に立派なものであつて着船荷役後曳船で名古屋へ廻材し

特等材立方一圓、一等材一圓三十五錢、二等材一圓二十五錢、普通材一圓十五錢

といふ値段で賣出した處二週間位で全部賣盡し、これに勢ひを得て田村商會、三菱等から五十萬或は百萬と仕入れ且つロバートダラーにも尚百萬の注文を發した、其他小角、レットシダー等も見本的に輸入をなした、でこの第一回取扱數量は三百萬BMで純益五万五千圓を擧げ得た。

ロバートダラー社の

一手販賣披露宴開催

大正十年二月十一日紀元節の佳日ボウとしてロバートダラー社の日本總支配人マルム・ゲ

レン氏及び同社員西博久氏等を名古屋に招き大須七ツ寺宮房樓に於て同業者數十名を招待しダラー中部日本一手販賣の大々的披露宴を開き大いに米材に對する認識を得さすべく宣傳之れ努めたのである、この宣傳と云ふ事は即ち名古屋は東西兩市場に比して米材の使用遅れて居り、由來名古屋は舊習慣を固守すると云ふ仕來りがあつて新しい事に關心を持つことが兎角遅れる氣味があつたからである、この時更らにロバートダラーとの間に六百六十萬BMの契約をなし、引續き四百四十萬の大中小角を契約した、値段は大中角四分六込千BM四十二弗乃至四十四弗、小角は三十八弗五十仙であつたが之れが他日大損失を招く抑々の第一歩であつた、昔から縁起をかつぐ云々といふが、この宴會で多少氣に障る事があつた、即ち宴會場へ入つて行くと六枚屏風が立てゝあるのだが少し變である、今まで下り松の繪なんか屏風では見た事がない、變だと思つてよくよく見れば逆さに立ててある、早速女中に命じて立て直させたが何となく氣に障る、同席の水谷孝三氏も何だか心が浮かぬと云つて元氣がなく、契約は止めたいと云はれる、著者もそんな氣がしたが、この位の事で縁起をかついで見ても仕方がないと考へ、且つは第一回の素晴らしい米材へのスタートが身に滲みてゐるので、こんな些事にこたはる要なしと思つてどしどし事を運んだので

あるが、前述の如く他日大損失を招いたのだから愈々以て縁起と云ふ事も良く考へねばならぬ、例へ迷信だと云はれる事でもその程度、事と次第に依つては馬鹿にして掛れるものではない何れも深奥な宇宙の攝理に密接な關聯を持つてゐるものだと考へたのである。

ダラーとの契約を期として名古屋港へはそれ迄木材積載の外國船は入港しなかつたものであるが之れを入港さすべく縣市當局、商工會議所、港務所と各關係先きを奔走して一件書類を市役所を経てアメリカの夫々主要港灣へ向けて送附し、名古屋の木材市場を認識させるべく努力したのである、それ程に當時の名古屋港並に名古屋木材市場は外國主要港灣都市からはあまり認められてゐなかつたが、こつした努力の効果があつてか幾程もなくして直接名古屋港に木材積載の外國船の入港を見るに至つた。

大病の事

死を恐れぬ大覺悟

大正九年十一月下旬上京して取引上多忙を極めると同時に各方面で招待を受けたり、或

ひは得意先を招待したりして多少不攝生であつた爲健康を害して十一月三十日歸名、十二月一日より病床につくに至つた、初めは普通の胃腸病だと思つてゐたが主治醫はじめ森田博士、杉山醫師の診察に依つて胃潰瘍と斷定されて恐愕した、經過は益々惡化して十二月十日に至り重態、危篤に陥り、自分も愈々死期の近づいた事を覺悟して、遺言をなし、枕頭に花を飾つて慰めとなし、僧侶に讀經、引導を授けてもらつて、死を待つばかり、大往生の時はいつかと靜かな心境にひたつてゐた。こつした状態だつたから近所の人、縁邊の人々、知己、友人は著者は最早死んだものと思はれて弔問の客引きも切らず、ところが著者は未だ息がある、靜かな悟りの床にあるので何れも面くらつて歸られるなどと云ふ有様であつた、斯うして死を決し、悲しまぬ、恐れぬ氣持が起死回生の妙藥となつて、十四日には危險期を脱して其後日一日と薄皮を剥ぐ様に快方へ向ふ様になつた、こつして病床に在つて十年の初春を迎へた、が未だ勿論足腰は立たず臥床のまま、ぞうにの代りに餅のスイプを攝つて正月氣分を味ひ、それより二月、三月兩月間は固形食物は控へて流動食のみで攝養に努めて、四月上旬全く全快するを得た、此の體驗から大病などの時はよくよせず大覺悟をもつて靜かに養生すべきで、命が無ければ止むを得ない、前世からの因縁とあ

きらめて大悟徹底すべきだとつくづく感じた次第である。

北洋組合の創立と

樺太材積極的進出

この時代は著者としては林木業界からはその地位を益々認められ、従って最も得意の時代であったが、ロバートグラ―との米材賣買、取扱ひに就ては流動資本の關係上大臺林業と共同經營を續けたのである。尙ほ大臺林業に於て北洋林組合を創立し之れが理事長に水谷孝三氏を、理事には著者と永田愛三氏、梅村好太郎氏らをもつて共同出資の許に樺太材伐出事業を開始した、この匿名組合の資本總額は二十五萬圓であった、而して著者は大正十年四月に樺太へ出張し事業の地たる留多加るーたか、芳内よしない(灣内)、泥川どろがほなどを巡視し、尙ほ西海岸まおかきんじう眞岡山道を経て前記留多加の奥地事業地を親しく視察したのである、此の當時は樺太に於ける森林に虫害の猛烈を極めた頃であつて樺太の森林はこのため實に慘澹たるものであつた。樺太廳では大正十年以前は島外移出は同廳山林局に於て或る程度の制限を附してゐた

がこの虫害のため其の禁を解いて虫害木は迅速に拂下をなし内地各地への移出を反對に獎勵する時代となつた、この機會を利用して所謂大臺林業内の北洋林組合は積極的方針のもとに前記巡視地以外にも東海岸といはず各地に伐採權を獲得或ひは造材師を利用して各地で買材を盛んになした、そして汽船をチャーターして適當な港に廻船し或は芝浦、清水、名古屋、和歌山、大阪にと夫々輸送し販賣をなして非常な好成績をあげたのである。斯くして第一年は四割の配當を各出資者に行ふ事が出来た。

當時の北洋材中丸太の價格は市場で六百圓乃至六百二、三十圓を前後して居つた。樺太の各事業地視察に就ては、昨今に比較して言語に絶した不便さであつた、まづ大泊おほどまりに於て一日百圓で小蒸汽船を借切つて、それによつて巡視したものである、西海岸眞岡まおかの如きは大泊おほどまりから船で迂回して上陸したのであつて今から考へると今昔の感に堪へない次第である、又各事業地を視察するには馬車によるか徒歩の外方法がなかつた、冬期は積雪を利用して犬橇によるのであつて、當時の交通不便は現今から考へて全く想像以上で、従つてその地方で仕事するには並大抵の努力では目的を達成することが至難であつた。

不便なる時こそ巨利を博する

木材事業

總て木材事業は不便な時代こそ利潤の多いものである、交通、通信機關が発達すればする程之れに反比例して利益は減少するのが原則である、北洋材組合もこの原則にもれず翌大正十一年には順調に進んで三割の配當、十二年度は二割の配當といふ有様で純利益は減少して行くのであつた、然し之れと同時に伐出も、買材も、船の運用も容易に實行出來得る様になつて來たのである。そこで一方著者の主たる責任ある濱木屋の營業上に於ても、第一に美濃、飛驒、木曾の山林伐出やら本社の直營事業としての鐵道省納入の枕木、橋梁用ポイント、其他並枕木、附隨せる鐵道用材料の營業も漸次利潤薄く、經營上にも非常なる困難を生じる様になり其經營上には一方ならぬ苦心を拂ひつゝあつた、又更に第二の主要なる製品としての北海板なども漸落を辿つて大正十二年八月末頃には束二圓三十五錢を示すに至つた、斯くて經營上に種々苦惱を重ね兎や角と苦慮しつつある所へもつて段々賣行きも鈍り製品の滞荷となり又經木を製造し該品を大阪で委託販賣させてゐた店の支配人

が費ひ込をなしその調査も兼ねて忘れもせぬ大正十二年九月一日の朝六時二十八分下り急行で製板主任を同伴して大阪に向つた、湊町驛で下車して大黒橋を渡ると同時に午前十一時五十八分。

關東大震災と

積極的活躍

何となく地面の動搖を感じた、そして相當大きな地震があつたと直感したのである、そこつうにするうちに附近の人家からも人が飛び出して來たりして益々強震であると思つた、まづ定宿たる吉岡旅館に着くと同時に本社へ急報をもつて電話を申込んだところ不通であるとの事、そして幾何もなく大朝、大毎などの號外が早くも配達され名古屋以東は未曾有の大震災のため一大混亂に陥り、殆ど全滅といふ第一號外をみて驚愕したが其時は新聞の所謂誇大な報導だ位に解譯して半信半疑で目的である取引の各板類問屋數軒を前日から豫約してあつた「はり半」の宗右エ門町支店に招きその席へ出頭し四分板約六千束の契約を結むたのである、其間に第二、第三、第四とひっきりなしに大震災の號外が配達される、

そこで之れは半信半疑であったものが最初の豫想を裏切つてかなり惨害の甚大なことを信ずるに至り、そこで席上に於て著者は各板問屋の方々に對し

「若し號外の如くであったならば今日の商談は解除することにして戴きたい」

と申出たところ、それは非常時の場合であるからとて承諾した人もあり又せぬ向もあつた斯くて商談を打ち切つて宿に引返し名古屋へ電話を申込んだがやはり不通である、で直ぐ様梅田驛へ馳け付けて驛構内の有様を一見して其雜沓振りにいたく驚愕した、何れも東京方面へ出發する人で構内は充滿し戦時の如き有様である、そこで自分の隨行者を直ちに伊勢方面へ向けて出發させ、伊勢松阪方面にある木材を買約するために行ける處まで行き一時も早く着き値段にかゝはらず買約する事を命じ、自分は大阪に一泊し様子を聞き合はしと見ると、東京方面の大震災の實狀が判明したので翌朝の一、二等急行で名古屋へ引返し震災對應策を講じた。即ち災害を被むつた人々は誠に御氣の毒であるが本業としてはまさに千歳一遇此好機にありとして出來得る限り各方面に活躍する事と決した。

此時初めて製材製板同志會を設立し自分が主唱者となつて、其團體の申合せにより北海エゾ、トド四分板束五十錢値上げを發表したが、九月一杯は關東を中心とした諸銀行の金融機關が或程度停止されたため商品界は鈍狀を呈したまゝであつた、されは前記の積極策はとつて見たものゝ聊か不安にかられ、一應災害地視察の必要を痛感するに至つた同月下旬、東海道線、中央線で二ヶ所程徒歩聯絡のとれる所があつたが同志相謀つて中央線によつて上京するを安全と考へ九月三十日夜出發上京したのである、その出發に際しての名古屋驛に於ける乗車の混雜は實に言語に絶し話しには聞いてゐたが其時こそ窓から飛び込むといふことを實地に經驗するといふ物凄しい状態でやつと席について發車、眞に生命がけである、又千種驛でも乗車客殺到、黒山の如く列車の屋上にまでシガミ附くもの或ひは連結の間立つもの等驛員の制止も聞かばこそ實に野蠻國でもへ行つた様な有様で全く大變なことであつた、そして乗客は無論總て東京へ行く人達であつて、これを見て東京も治安恢復し商取引を開始しつゝあるものと推量して千種驛から多治見驛迄の間に

「賣り物は目を閉じ耳を塞いで買へ、東京より通信する迄は買ひの一本槍で賣るな」と手紙で店へ命じ勇奮して東京へ向つた。

入京は東京の手前から徒歩聯絡で新宿へ到着した、新宿からは電車が通じてゐたので乗車して被害地を視察しつゝ丸ノ内竹中組本部へ出頭して竹中藤右エ門氏に面接した、そこ

で注文される數量の多いのと納付期限の短いのに驚きつゝ竹中組の指定で内幸町の芝虎館に投宿した。尚ほ其當時には一通三十字より電報を取扱はぬことになってゐたのでこの帝都の有様と實況、それに名古屋で今迄どれ程買約出來たかを問合せた至急電報を十二、三枚の頼信紙に書き露天の假設中央電信局前に整列して、それだけの意味を兎に角名古屋へ向けて打電したのであった。其後得意先たる數矢町喜多商店から十三萬圓程の注文を引請け、それが半金現金であつたから六萬五千圓を風呂敷に包んで持つてはみたものゝ毎日七千圓より送れないので止むなく先づ現金二千圓を受取り残は毎日七千圓宛六萬五千圓に達する迄送らせたとして残り半金は品物芝浦着現金といふことで契約し勇躍して東海道線によつて歸名したのであつた、其時を回顧してみると

東京では尚ほ餘震が治まらず深川の貯木場には屍體の腐敗したのがボカボカと浮んで居り到底正視出来るものではなかつたし永代橋を渡つた住友倉庫あたりは尚ブスブス燃えて居つた。それから丸ノ内の内外ビルディング邊りには百五、六十名が生埋になつたまゝであつて蠅が盛んに破壊されたコンクリートの隙間から無数に出入りしてゐたのを實見した程である。

こつした悲惨な摸様を見て何とも言ひ知れぬ感慨に打たれながら自分は巻脚絆に水筒を持って歩いた。

又急な場合には小型自動車（ベビーフォード）を一日三十圓で借切つてそれもなるべく粗末な車を撰んだもので美しい車には氣が引けて乗れなかつた、これで各得意先の避難所へ慰問に又は商取引に馳け廻つたのである、その當時憲兵、警官に對してはいつ如何なる場合、場所でも便乗させねばならなかつた、兎も角、注文も相當量引請けて好成绩を擧げるに至つたがその間の苦心は實に筆紙に盡し難いところである。

「編者附記」濱木屋が株式組織となり愈々伸び伸びとした大活躍を開始した大正九年より關東大震災の大正十二年に至る前後の社會狀勢の動向について述べれば

大正八年、二月には前年たる大正七年末に於ける英米の鐵解禁に依る關西地方鐵商の破綻續出に對し製鐵業救濟問題起る、三月朝鮮京城に萬歲騒動起り、後各地に波及、朝鮮獨立運動の嚆矢と見られ此種運動は後年種々姿を變へ最近迄繼續された、六月廿八日巴里に於て歐洲大戰媾和條約調印さる、時の帝國代表は西園寺公、牧野伯也。八月烟草値上げされ、九月に入りて白米一升六十錢と云ふ騰貴値段出現す、十月政府は（原敬内閣）

物價調節に關する施政方針を發表し暴利取締令を公布、更らに十一月政府は投機抑制のため全國銀行に對して貸出引締めに關する訓示をなす、同月米國ワシントンに於て第一回國際勞働會議開催され、八時間制、幼年工問題につき日本は「特殊國」と認定さる、十二月に至るや日本銀行の兌換券發行高は十五億圓を突破し、コール日歩三錢三里を示す、同年は投機熱に煽られて一大ブームを現出、年度末に於ける歳入剩餘金六億三千万圓に達し戰時中國際貸借受取勘定金は合計廿七億四千萬圓にして戰時景氣の最頂點に達せり、併し既に貿易は逆轉し入超を示しはじめたり。大正九年、一月投機熱衰へず諸商品市場はいづれも全く天井知らずの昂騰相場を露呈し、生糸現物相場最高四、三六〇圓、大阪綿糸現物相場最高五九八圓六七錢、深川正米相場最高五五圓一〇錢、鐘紡先物大引相場の高値五四一圓九〇錢と云ふ商況であつた。二月廿六日政府は衆議院解散を斷行、この解散の主旨は憲政會、國民黨提出の普選案が議會に上程されたる爲原首相は議會に於ては政府勝つとは信ずるも一應國民の批判に訴へるといふのであつた、五月十日右解散に依る第十四回總選舉施行せられ、政府與黨たる政友會大勝す、三月十五日に至るや數年來の狂熱的景氣の反動顯れ株式市場は東株百圓安、紡績株六十圓安と云ふが如き大

暴落を示し大恐慌襲來す、次いで商品市場に波及し諸商品總崩れを示現し慘憺たる市況を呈す、四月増田ビルブローカー銀行の破綻を端緒として金融恐慌勃發し、株式、生糸期米、綿糸各市場は更らに一齊崩落、立合停止に次ぐ立合停止を演じ、遂に各地に銀行取付騒ぎ起り、日本銀行は財界救済資金として貸出額一億二千萬圓を決定す、同月アメリカニューヨーク市場にも恐慌勃發す、五月アメリカの恐慌に依り茂木合名は破綻するに至り、七十四銀行の整理休業、波紋は愈々擴大され、大瓦落は次の大瓦落を誘起して止まる所を知らず、取引は一時杜絶の状態を呈示せり、四月以來七月に至る迄の四ヶ月間に現金の取付を受けたる銀行は本支店を通じて百六十九行の多きに達し實に國內金融界は暗澹として未曾有の危局にありたり、この間工業會社の操短が盛んに行はれ、各紡績會社、毛織會社は二割の操短を決定し各地操業も五、六、七、三ヶ月間の休業を實行して生産量のカバーをなし、又鉄鐵同業會、産銅組合、糖業聯合會等いづれも減産協定を行ひオーバーストックの一掃に努力せり、特に生糸恐慌は益々惡化し生糸價は千百圓を示す、即ち同年初に於ける最高値段四千圓臺の四分の一に崩落し新繭も亦暴落を演じ養蠶家は愈々窮迫す、依つて政府は第二次帝國蠶糸會社を設立し三千萬圓限度の損失補償

を決定して蠶糸業の救済に當れり、十月第一回國勢調査施行せられ當時の人口五五、九六三、〇五三人と發表さる、同年の入超額は四億九千萬圓を示現せり。大正十年、一月深川正米相場最高二八圓九錢を示し、白米標準相場は一圓に付き二升六合九勺となる、

三月三日 皇太子殿下（今上陛下）御外遊被遊

四月に至つて物價指數に就き檢討を行つて見ると戦前基準として大正九年三月の最高指數三三八より一年間に一三八ポイント方激落して二〇〇を示すに至れり、同月米穀法及米穀需給特別會計法公布さる並に職業紹介法發布せらる、五月となるや昨年設立された第二次帝國蠶絲會社の補償生絲買収完了し買入總高七萬二千餘捆に達す、これに依り市場は漸く安定の兆見ゆ、七月十三日、我が國は米國大統領の日英佛伊に對する海軍軍縮會議の提議に應諾して、加藤友三郎、徳川家達、幣原喜重郎諸氏を全權としてワシントン會議へ派遣する事に決せり、全權は十月出發せり、八月頃より中間景氣現はる、我國の物價水準は世界の大勢に反して昂騰に轉ず、此の物價高は輸入を促進して貿易逆調の勢愈々激しく依て爲替は低落を辿るに至る。同月農商務省は小賣商人の暴利取締方の訓令を發す、十一月四日原首相東京驛にて中岡良一の爲に刺殺された。

同月廿五日 皇太子殿下（今上陛下）攝政の任に就からせる

この年重工業部門各方面に反動顯れ職工の大量餓首行はれ爭議頻發す、就中神戸の川崎三菱兩造船所の爭議は罷業参加人員四萬餘人、罷業日數四十六日に亘る大ストライキであつた、然し職工側は何れも慘敗に終れり、同年の入超額は四億四千萬圓に達す。

大正十一年、二月ワシントンに於て海軍軍備制限條約成立し八々艦隊建造計畫は中止となる、而して造船業に一大打撃を與へたり。同月石井商店は八千萬圓の債務を残して破産す、之に關係を有する銀行は三五行に達せり、四月信託法及信託業法公布さる、六月六日高橋首相は内閣改造を企て、元田、中橋兩相反對をなし内閣不統一にて總辭職をなす、六月十二日加藤友三郎内閣成立し、同内閣はワシントン條約に従ひ海軍縮小を行ひ同時に山梨陸相をして陸軍々縮を行はしめた、九月には新取引所法施行せらる。本年々初には中間景氣現はれ下期に入りて金融梗塞を來し商取引の沈衰となり大勢は愈々恐慌後の不況期に入る、年末十一月になるや積善銀行は不善を曝露して破綻し、報徳銀行にも取付騒ぎなどありて、全国各地に於て破綻を曝露するもの二十九行に及べり。

大正十二年、三月陪審法案貴衆兩院を通過す、四月産業組合中央金庫法公布され全國購

買組合聯合會創立さる、九月一日關東地方大震災に見舞はれ國家の損失は實に五十五億圓と稱せらる、同日東京市及附近郡部に戒嚴令施行さる、同日地震内閣と云はれたる第二次山本權兵衛内閣成立す、同十六日帝都復興審議會組織され、同廿七日帝都復興院官制公布されたり、同月の經濟關係事項としては暴利取締令、支拂猶豫令、治安維持の三大緊急敕令發布せらる、八日には東京六大銀行は營業を開始せり、廿七日震災手形損失補償令公布さる、同時に日本銀行は有價證券に對する無制限貸出しの聲明をなし、政府は日本銀行に對して救濟資金一億圓融通を保證し、震災手形二ヶ年間支拂猶豫を發令十月下旬に至り早くも復興氣分起り商内は頗る殷振を極む、年末に於ける兌換券發行高十六億九千萬圓に上り通貨の大膨張を示す、而して入超額は六億一千三百萬圓の巨額に達せり、十一月十五日戒嚴令撤廢さる。

同時に大正八年以來十二年迄の名古屋木材市場の動向推移につき述べれば

大正八年、七月五日名古屋材木商同業組合事務所に於て愛知製材組合の委員會開かれ席上同組合を解散して名材組合へ合併の件を可決す、同製材組合は後七月廿日東海樓に臨時總會を開き組合合併を可決せり、越へて同七日名材組合は評議員會を開いて愛知製材

業組合の名材組合加入の件を協議可決、九月廿八日定時總會を開き製函及製材部の増設に關する本組合定款變更の件を協議、十一月廿日に至り右定款變更の認可ありたり、即ち名古屋材木商「工」同業組合と名稱を變更し從來の出材、問屋、小賣の三部に製函、製材の二部を加へ之れに伴ふ關係條項の變更を見たるものなり。大正九年は別して大した事もなく財界のパニックに依り多少の動搖ありたる位にして、十二月七日には名材組合評議員會を開催して次の如き決議をなせり、即ち、國有鐵道貨物輸送賃の値上は目下の經濟界の狀勢に背馳するを以て當局の反省を促すべき意見書案を可決。大正十年十月十八日、區制變更により組合事務所々在地を南區西古渡町字中島五十八番地と變更さる大正十一年十二月二日、帝室林野局へ御料地拂下陳情の爲（名古屋市南區熱田西町字幣懸一番地ノ四）正副組長、書記等上京林野局へ出頭、十二月二十五日臨時組合總會を開催、製函部の名稱廢止による定款變更の件を可決。大正十二年、新市制施行に伴ひ組合定款第六條の但書を削除し（組合地區に關する但書、名古屋市一圓愛知郡の内八幡村、千種町、愛知町、呼續町）地區を名古屋市一圓と改正す、同六月二十六日組合最初の代議員選舉總會を開き左の如く各部代議員を選舉せり、

第一部	正員	三十名	補缺員	十五名
第二部	"	十名	"	五名

十月十八日帝室林野局より左記の通り地所の拂下許可に接したり。

名古屋市南区熱田西町字幣懸一番地ノ四

御料地外三筆地上立木共（面積八千五百五十六坪一合五勺）右地所の内組合事務所建築
豫定地及び長谷川糾七、平野増吉兩氏への贈與地を除きたる六千六百五十四坪六合八勺
を三十口に分割し大正十二年十二月十八日組合員に限り借受人札を執行し大正十三年一
月より貸借契約を締結せり右に依り、十二月二十七日臨時組合會を開催し不動産の監理
に關する條項追加の爲定款變更及不動産部規則を設定せり。

關東大震災と

名古屋市場の影響

著者自身も關東大震災には色々と活躍、苦勞せられたが、編者は名古屋木材市場全般に

亘つてその影響を述べたいと思ふ、それには色々と文獻もある處であるが編者は名材組合
編纂に係る「名古屋木材市場の變遷」後遍に収録しある故愛知縣林務課長高瀬伍助氏の談
話並に震災救護用材調達状況に關する原稿をそのまゝ再録して高所より眺めたる名古屋市
場の影響を偲ぶよすがとしたい。

故高瀬伍助氏

”談話”實は私はあの大正十二年の關東大震災の時の木材供給につきまして記憶のまゝ
に書いた原稿がありますから之を見て頂きたいと思ひますが、關東大震災當時の救護材
調達の事でも御話しして震災當時の状況を偲びたいと思います。兎に角あの震災には
通信機關といふものは全部杜絶してしまつたのでどうにも手の下し様がなかつた、震災
が起ると直ぐ横須賀の海軍鎮守府からこちらへ注文が來たが、向方の様子がどうなつて
居るやらさつぱり判らない、手紙は無論、電信、電話あらゆる通信機關を使ったが少し
も向方に通じない、もうぢりぢりしていろいろと對策を講じてみたがどうしても駄目だ
こんな事が約一週間も續いたでせう、もうどうにも仕方がないといふので最後に傳書鳩

を使って漸くそれで向方と通信する事が出来たが、まあ其間の苦勞といふものは一通りではなかつたです、それですぐ様市内の各工場に製材を依頼し諸君の努力に依つて罹災民が救はれるのだといふ様な事を云つて各工場を一々激勵して廻つたので、各工場とも非常な熱をあげ晝夜兼行の大馬力でもつて僅か四日間位の間には二萬石から出来てしまつた、之れは製材した材積ですから非常に大きなものです、それでそいつを輸送するといふ事になつて又一苦勞して漸く其責任だけは果しましたが、當時堀川には二百艘許りの舳があつたが、そいつを約八十艘ばかり押さへてしまつて、それで以てどんどん本船に積込んだのです、さあその爲に名古屋の動脈である堀川の貨物が積めない、どうするのだといふ事で正に重大なる社會問題まで引起そうとしましたが、實にあの時の状況は今思ひだしてもひやひやする様なことです、それに未だひやひやした事は、何でも二萬噸ばかりの船だつたと思ひますが、米國から重油を積んで来る所の重油船が横須賀から救護材積込の爲にやつて来た所が名古屋港からは多らい沖合に碇泊するといふ事だつたのでとても其處までは木材が持つて行けない、それで色々交渉の結果四日市港に其船を入れて貰つて、そつして非常な危険を冒して名古屋港から四日市までランチでもつて木材

を引張り漸く其船へ積込んだが、あれが波でもあつたり又ロープでも切れ様ものならそれこそ大變な事で、あれだけの木材が散亂してどうにもかうにも手がつけられない事になつたゝらうと思ひます。實にははらする様な事をやつたものです、然し救護材を辯天丸に積込んで私も其船に乗込み、九月十六日の朝こちらを出帆して十七日の朝芝浦につきましたが、あの芝浦の海岸に救護品を格納するバラックがずっと出来てゐるのをみた時には嬉しい様な悲しい様な何とも云へぬ心持に打たれて思はず涙が滲みましました、それからと云ふものは私の方の課のものが一週間交代位で二、三人づつ出張して芝浦の三業組合事務所を占領して其處を事務所にして引渡業務を執つて居つたのです、ところが藝妓置屋、待合、料理屋といったものが十月の末頃から營業を開始したので、それからと云ふものは待合も引渡事務所と云つた様な格好な事になり、もう晝夜兼行の大車輪をかけたものです、まあ御話しすれば色々な事がありますが、名古屋港の事業といふものが今日の如き隆盛を招くに至つたのはあの關東大震災の時の木材供給といふ事が今日の名古屋港を築くに至つた劃期的動機になつたと云つてよいと思ひます。

震災救護用材調達状況

(愛知縣林務課長故高瀬五助氏座談會提出原稿)

時は大正十二年九月一日午前十一時五十八分突如天地の大震動は關東地方一帯に襲來し、爲に無數の屋舎は倒潰し多大の人命を殺傷する一大凶變が惹起されました、之に次ぎ火災を繼發し、猛火凶焰は天を焦し、僅かに二晝夜にして遠が文化を以て誇る帝都の大都も灰燼し、遂に廣茫たる焼野原となりました、尙帝國の關門たる横濱市を初め其の災害の及ぶ所一府六縣の廣きに亘り十數萬の貴き生靈と巨億の財貨とは須臾にして烏有に歸せしめたのであります、蓋し有史以來未曾有の大禍難で、世を擧げて戰慄驚愕したことは今尙吾々の記憶新なるものがあります、而して此の凶變一度傳はるや緊急之が罹災地救護の聲は各地を通じ誠に喧しきものがありました、政府に於ては直に臨時震災救護事務局を設置し、罹災地の救護並に復興に關する諸般の事務を開始せらるゝことになつたのであります、即ち九月七日午後二時二十五分臨時震災救護事務局より我が愛知縣へ「小屋掛材料板、檜、小丸太、小角取混ぜ三萬石至急送れ」との急電は到着致しまし

た、仍て即日午後三時に左の返電を發したのであります「小屋掛材料は十日までに全部集まる見込にて目下船舶の交渉中」茲に於て我が林務課は直に課員の總動員を行ひ各般の實行に着手しました、即ち當名古屋市場に於ける材木關係の有力なる各位の御參集を求め各材料の單價各商店に對する割當の種類、數量、發送方法等の事項を數刻にして取纏め、翌日より直ちに材料の檢收並に發送に着手致しました、實は其當時斯くの如き多數の製材品を短時日に取纏め得るや否やを憂慮したのであります、誠に手際よく計畫通り進行するを得ましたのは各位の御努力は勿論ながら當市場の潛勢力の偉大なるに今更驚いたことであります。即ち初日發送は九月十六日より十九日迄に三隻の汽船に依て前記材料を滿載し、名古屋港を出帆致しました、斯くて恙なく順次震災事務局に引渡を了しました、次に横須賀海軍戒嚴司令官よりバラック用及海軍々事用木材(板類、小角檜、垂木、小丸太)五千石の購入依頼があり、軍艦千早、特務艦神威に依て横須賀に送付しました、續て九月二十八日午前九時二十分東京市長より知事宛來電「バラック用木材を十月中に手に入れたし臨時救護事務局にて取寄せたる分の値段にて御買付けを願ふ事出來得る數量何程位ありや、若し買付得るものあらば何程にても御買付の上御送り願

度し」九月二十八日午後五時返電「本日電報を以て御依頼の「バラック」用木材購入の件は前と同價又は幾分低價にて十日間につき五萬石づゝ買付け得る見込」の返電は發せられました十月一日午前十一時五十七分着電「バラック用材の件御配達を感謝す用材の割合は板十石に對し柱類六石、小角六分石、檣類一石、敷居鴨居三分石の見當に願度し成可く多くしさに發送ありたし御買付の値段及船名芝浦着の豫定日時承り度次の五萬石は更に御願ひする迄發送中止ありたし」右東京市長よりの電報に接し私は詳細打合せの必要あり直ちに上京致しました、本件は取扱上縣山林會に於てなすを便宜と認め其旨交渉の結果バラック用材五萬石購入の件愛知縣山林會の名を以て全部の手配をなすことに決定致しました、茲に於て再び業界各位の御參集を求め買付、發送等各般の事項を決定し直に着手したのであります、此時各位の工場は全能力を擧げ罹災民の救護一日も早かれと念じつゝ日夜奮闘努力せられ恰も戰時動員下令の下にあるの感がありました、然して十月十日より十一月十四日迄に亘り八隻の汽船に依て前記材料五萬石を完全に發送し夫々東京市に引渡しを了したのであります、此間吾々は各位と共に不眠不休眞に寢食を忘れて活動を續けたのであります、十ヶ年を経過する今日茲に當時を回想して誠

に今昔の感深いものがあります、只微力によく此の大業を果して罹災地當局の期待に添ひ得たことは一に各位の深甚なる御協力の賜でありまして、深く感謝すると共に自ら満足に感ずる次第であります。

官廳關係から眺めた正確な狀況は以上で盡きてゐるが、業者側としての當時の狀況に對する感想、實驗談を更に附記して震災關係の記録を終止したいと思ふ。

(名材組合編纂、名古屋木材市場の變遷後編収録座談會筆記録 水谷孝三氏談話)

『其時の記憶がありますから一寸御話致しますが、山王橋際に組合事務所があつた時で彼處へ午後四時頃に一ペン來いとふ事で行つて見ると、服部さんも(先代服部小十郎氏)、長谷川さんも(長谷川糾七氏)それから、高瀬さん(前愛知縣林務課長故高瀬伍助氏)と縣廳の方が居られる、あとは製材屋さんがずっと並んで居て、其時の注文の板が十萬束、小角が五千石これを十日以内に造れといふ話で、製材屋さんは板は引受るが小角は何んとしても出來んと斷はられた、夫れは不可んどつしても造れといふことで、長谷川さんが最後に私を呼に來て行きました、他の木材市場からもどんどん出して居るから他所に遅れては愛知縣の面目問題だ、どんな手段でも講じて造つて貰い度いと云ふ事だ、そこ

で考へると私の店に米材の小角丈では足らぬが北海材の丸太は澤山所有して居る故之を交て良ければ期日通り小角を一手に引受けましようと話しました、北海道材はあの時分六百三十圓位だったので七百五十圓位に見て才十五錢位の割合で引受ければ良いと云ふので任せて頂いて、その代り縣廳で市内の有数の工場へ是非此製材を引受けて呉れと云ふ依頼狀を五、六枚書いて頂いて、そうして製材屋を呼んで頂いて、とうとう十日間に豫定通り製材して辯天丸に積み込みましたが、其爲に解がなくなって他の荷が運べないといふので問題が起りました、兎に角築港へ持つて行つて港務所長の奥田さんに（奥田助七郎氏）無理を云つてやつと積んだ様な事ですが、其船が東京へ行つたのは兎に角日本中で一番名古屋が早かつた、高瀬さんも非常に喜んで居られた、其後數回注文が入りまして私の店は勿論、今度は製材屋の山岸、濱木屋さん等も大變お挽きになつたが、今度は材木が七百五十圓から八百五十圓にもなつて七百五十圓の割合で最後迄相當の數量を提供いたしました、六百二、三十圓の材木が七百五十圓なら良いと思つたのです、尙此非常時に東京で此小角類が第一の御用に立つた事を嬉んで居ります云々。』

關東大震災と

濱木屋の成績

狂熱的相場は逸早く冷卻

關東大震災に依り結局濱木屋としては非常な好成绩を挙げ、約十二萬圓内外の純利益を計上する事が出来た、然しこの精算をした時尚ほ震災復興材引當にアメリカ材を豫約して未着のものがあつたので之れは損失となるものと考へ補填金として三萬圓を豫備金に保留しておいたのである。斯くて愈々米材は大正十二年十二月頃注文せる翌年一、二、三月積の豫約材が十三年二、三、四の三ヶ月間に入荷した爲結局五萬圓程の損失を來し三萬圓の補填金に尙二萬圓不足の有様であつてそれ程震災の狂熱的相場は早くも冷卻したのである。

會社經營上の苦心

其當時から著者自身としては非常に會社を經營する上に於て年々の經常費の負擔上各大株主始め一般株式に専務取締役としての責任上營業成績と經常費の比例を考へると苦心の

あることを痛感した。相當の成績をあげるには或る程度の冒險も加味した思惑もせねばならぬ、堅實主義一點張りで進めば成績上らぬ、といふ大きなジレンマに陥るといふ事を考へ出したのである、同時に著者は大正十三年は經濟界は暗澹であらうと推察した、即ち國富を有形無形に百億圓以上をも一朝にして灰燼消失せしめた大震災後であるからその痛手は時を経るに従つて漸次地方にも波動するし、又百億圓以上の國民の財産が夫れだけ減少したのだからその恢復には相當の紆餘曲折を経なければならぬことは常然である、従つて十三年の材界は伸びんとして容易に伸び得ざる苦しい年であらうとの見透しをつけたのである。そこで之れはまづ第一に大臺林業を次には濱木屋の重職を後進に譲る、そして著者は勇退する時であると考へ熟慮の結果それを決行することゝした、前述の如く自己の地位をもつて大正七八年後の好景氣時代に處して、種々の苦心は伴なつたが意の如く順調に進み、著者個人の地位は益々向上し、且つ關係會社も夫々順調發展するに至つたが、著者自信の一身上、家庭上に就て反省する時、あまりにも家庭を顧みる事を疎略にしてゐた事

を發見した、今迄は會社經營上に一意専心せし爲家庭は全て放りっぱなしとなつてゐたがいとしい吾子に父として一家団樂の楽しみを得さしめたいと痛切に思ふ様になつた。それ等が結局著者が濱木屋を退居せんと決心するに至つた一つの原因となつたのである。

遂いに

大臺林業取締役

濱木屋専務取締役

共に辭任

こつした理由から内心深く決するところがあつて重職より身を退くべきだと考へるに至つた先づ大正十三年五月頃大臺林業の常務取締役を辭任して取締役となり續いて十二月にはこの取締役をも辭任し、同時に濱木屋へも正式に辭任を申出たのである、ところが社長を始め副社長、其他重役一同は意外に思はれ、極力留任方を主張されたが前述の關係から深く決するところのあつたのと若し事業上に失敗することあらば主家を一層ないがしろに

して凡て事を自己本意に運んで損をさせ、失敗させたと云はれることとなり、それ等を考へた時此の上重職に甘んじてゐる事は出来ない、是非曲げても社長を始め後進者で經營は出來得るから聞き届けられたいと歎願し漸く十四年一月に至つて内諾を得、三月末日の年度替りを以て三十有一年間勤務した濱木屋を退社することになった。其時の自分の感慨は實に無量、何とも言葉に言ひ現はせぬ、寂寥といふか、名狀し難い気持ちであつた、人生の大部分を暮し、住み馴れて來た主家、幼年時代から非常な鴻恩を受けた主家を去るのだから其の氣持は全く唯々胸に迫る悲しみ、こみ上げて來る淋しさをどうする事も出來なかつた、然し遠くへ去るものではない、自分の生命のある限りはこの恩を忘れず精神上にも亦事情の許す限り物質上にも報恩の誠を盡さねばならぬと心に誓つたのである。

尙ほ茲で附言しておきたい事は濱木屋對著者はロバート・ダラーの一件から主家としては著者の一擧手、一投足に多少の疑惑の眼を向けられた様であつたが、何等疚しい處なく且つ水谷、永田、長谷川諸氏と共に樺太の落葉松を買占めた時などは美事に適中し十割の配當を行つた事もあり手を染めること何一つとして適中せぬことなしと云う有様で兎にも角にも三十有一ヶ年間眞に主家の爲を思い紛骨碎身努力を重ねて來たのであつて、尙ほ著

者の力が足らざりし爲、一層の盛大を招く事が出來なかつたが顧みて主家の厚恩に聊かの報恩を果し得たと自ら信じ自ら慰めてゐる次第である。

井桁藤商店愈々創立

著者の個人經營として大正十四年四月一日開店

愈々獨立を以て名古屋市南區東築地五號地三番地に井桁藤商店を創立、小出治郎太、宮戸新一、長田英雄、堀勝義、蟹江忠作、清水弘和等を店員として中丸太及米材を主として堂々十四年四月一日に營業を開始した。一方三井物産支店に出入して特に信任を得、木材部主任安立辰彦氏、山村專三氏らと肝膽相照し、同年六月には支店長諒解のもとに三井物産とジョイント計算で三十萬圓内外を限度として中丸太の買約に取掛つたのである。井桁藤商店といふ名稱は著者の祖先は「井桁屋^{みげたや}」といふ屋號を唱へてゐたが、父の代に町内等では「井桁藤」と呼ばれてゐたのであつて、それを繼承したのである。